



町内会  
性処理係

C G

「ふぁ〜… おはよう」

「おはよう！ パパ起きるのおそ〜い」

「ははは… ぐっすり寝ちゃったよ。  
起こしてくれてもいいのに」

「おはようございます、博司さん。

日曜くらいゆっくりしてもらおうと思って」

「せっかくの休みなのに寝て過ごしたらもったいないだろう？  
皆でどっか行こうか？」

「賛成〜！」

「あ、ごめんなさい。  
これから町内会の集まりがあるの。  
みゆきとふたりで行ってきたら？」

「え〜」

「町内会の集まりだったら僕も行くよ。  
平日だと行けないしね」

「大した事しないからいいわよ。  
それよりみゆきと遊びに行ったら？  
最近友達とばっかり遊んでて  
博司さんとお出掛けする機会ないでしょ」

「それもそうだね…  
それじゃ今日はパパとデートに行こうか」

「うん！ 私見たい映画があるんだ」

「ふふっ」

「失礼しま〜す… っでどうしたんですか？」

「ああ、星空さん！ 良かった来てくれて！」

実は性処理係りの1人が急に来れなくなっでね…  
星空さんをお願いしたいんですが…」



「せ、性処理係りっで…！ 私、既婚者なんですけど…」

「そこを何とか！」

他に性処理係りが務まりそうな人がいなくて…  
どうしてもお願い出来ませんか？」

「性処理係りっでエッチな事するんですよね？  
無理です！ 夫もいますし…！」





「そうですか… 仕方ない…  
この娘たちに頑張ってもらおうしかないですね」

「この子達が性処理係り…!?  
ウチのみゆきと同じくらいじゃない…!」

「ウオオオオオツツツツ!!!」  
「な、なに?」

「いつまで待たせんだコラァ!!!  
早く女出せ! 女ァ!」



「ふたりじゃ大変だろうけど  
星空さんが嫌だと言うのなら仕方がない  
輝木さん、十六夜さん、お願いします  
大丈夫： 死にはしないよ… 多分…」

「何で私が…！」  
「イヤです…」





「みゆきがこの子達と同じ目にあってたら  
黙っていられないけど……でも……!」

「大丈夫……! 大丈夫だから……!  
オイ、この娘ら男どもの所に放り投げる!」

「ひっ……!」

「ヤダあ……!」



「ま、待っててください！ あの……！ 私やります！ だからこの子達は……！」



「おお、やってくれますか！  
ありがとうございます。」

「ではこちらの衣装に着替えてもらえますか？」

「うう……」

「……はい」

(ゴムゴム)



「この格好… 変じゃないですか…」  
「いえいえ、とても似合ってますよ！ さあ、お願いします！」  
「はい…」



「あの…！」  
「あなた達は何もしなくていいのよ。私が何とかしてみせるから…」  
「でも…」  
「こんな事、嫁入り前の子にさせられないわ。  
私はもう結婚して子供もいるから…」



「博司さんには言えないけど…  
ごめんなさい、博司さん…」




「来たぞッ!!  
早くやらせろおッ!!  
女ア!

「あ、あの! お、落ち着いてください!...!!  
えーと... 手で! 手でしてあげますから...!!」



「ほら！口も使えよ！」  
「は、はい……」

（博司さん以外のおチンチンなんて  
触りたくないのに……！  
うう……すごい味……それに匂いが……）



「全然気持ち良くねーぞ！  
やる気あんのかつ!?」  
「ごごめんなさい！  
こうですか…?」

「そんなんじゃないかねーよ！  
何人待ってると思ってんだ！」  
「すいません！ すいません…!」



「あーもー！ 全然ダメ！  
待ってらんねえよ！ マンコ使わせろ！」

「それだけは……！ 許して……！」

「おっ、何だあそこにも女がいるじゃねえか！  
あいつらにもやらせようぜ！」

（あの子たち……!?）



「あの……！  
セックスしていいですから！  
あの子たちは関係ないです！」

「やらせてくれるなら何でもいいで  
早くケツ出せよ！」

「は、はい……」



(博司さんごめんなさい……)  
「ど、どうぞ……」









© 2010

おっぱい

お尻

「次俺ね」  
「は、はい……」







「はあーはあー 待って… 少し休ませて…」  
「どんだけ待ってると思ってるんだよ！ 早くしろ！  
無理矢理にでもやっちまえ！」  
「そんな…！」





「待って！ 私たちもするから…  
お姉さんに乱暴しないで！」

「はーはー…  
あなたたち…」

「お姉さんにだけ嫌な事させられないよ」  
「うん 見てるだけなんて耐えられない」  
「ごめんなさい…」





「おらっ！ しっかり舐めろよ！」  
「ふあ、ふあい…」

んん

んん







「ふう… まだまだ待ってる奴はいるからな」



「お疲れさまでした。

また明日もお願いしますね」

「はぁーはぁー」

「イヤ……」

「も、もうやだぁ……」



「性処理係りは人手不足ですから  
代わりがいなくてねえ……」

「ご家族か友人の方に代わって頂く事  
になりますかよろしいですか？」

「そんな……!？」

「……!」



「ダメです！ わ、私がやります……」

「私も…… やります……」

「……私も」





「次の担当の方が決まるまで  
よろしくお願いしますね」

「はい……」

「……」

数日後――

性処理係りの仕事にも慣れてきた3人の姿があった。

「育代さん、おっぱいで挟んで」  
「は〜い」

「すご〜っ…… 私には無理」

「ふふっ、ほまれちゃんもその内  
こっぴついう事出来るくらいおっきくなるわよ」

「いや…… そういう事したくはないですけど……」  
「そ、そうねえ……」



「ほまれちゃん大分上手くなったんじゃない?」  
「ええ、どうやったたらいくのかコツ掴んできました」

「いいな、楽しんで」

「リコちゃんもフェラ上手になったよ ほら、いくっ!」

「あはは… 私はザーメン飲むの無理…」

「食わず嫌いはダメだよ! ほら、ほまれちゃんも飲んで!」

「うん…」

「育代さん! イくよ!」

「はっい」



「いっぱい出ましたね」

「ふう… ありがとう」

「育代さんは性処理の仕事終わった後は大丈夫ですか？」  
「終わった後って？」  
「私、学校でもこういうのやらされてるんですよ」



回想中——

「輝木って性処理係りなんだろ？俺らの性処理も頼むよ」  
「いいけど… 何でトイレに縛り付けるの…!?!」  
「そりゃお前… 肉便器だからに決まってるんだろ ギャハハハ！」  
「ひど…」



「おお……！ 輝木のマンコ気ん持ち良い〜！」  
「早く代われよ 昼休み終わっちゃうよ」  
「待てって」

「もっと気持ち良さそうにしろよ〜！」  
「……」





「くっ！」  
「出すの早えくーゲラゲラ」  
「うっせ！ 待ってる奴のために早く出してやったんだよ！」

ジュジュ

ジュジュ





「いや、俺輝木の事好きだったからこれはこれでショックだわ」  
「良かったじゃん、やれて」  
「まーな」  
「……」

「お前ら昼休みは終わりだぞ！」  
「俺まだやってねえよ！」  
「次の休み時間まで我慢しろ！」  
「ちえー！」





「ふむう……！ やっぱり若い子のマンコはキツくていいな……！」  
「じゅ、授業…… あるんですけど……」  
「授業も大事だが性処理係りの仕事も大事だからな！」  
「輝木は授業出なくてもいいぞ！」  
「授業の方がマシ……！」



「ふう…他にも輝木とやりたいてって先生いるから頼むな」



「そんな感じで学校行っても  
ほとんどトイレにくくりつけ！  
イヤになっちゃう」

「イジメじゃない…？ それ…」  
「ですよね… リコは学校じゃ大丈夫なの？」

「私はイジメみたいにはなっていないけど…  
もっとオープンと言おうか…」



回想中——

「次、十六夜」  
「は、はひっ……!! ぎ、祇園精舎っ!! の、か、鐘の声……!!」  
「やり直し! あえいでないでちゃんと読め!」  
「す、すいませっ……!! うっ……!!」



ド  
ズ  
ッ

「あっ、あっ……!!」

「そんなんじゃないやー性処理係りの仕事は務まらんぞー!」

「はひ…… すいません……」

「先生ー、次俺いっすか?」

「ああ、静かにな」

「うーす」

「十六夜最初から」

「はい……」



「ぎ、ぎおんしようじゃっ! の、かっ! かねの、こえ……!」

「さっきよりダメになってるじゃないか。もういい! 家で100回読み直してこい!」

「はひっ……! すいませっ……!」

「次、井上!」

「はい」

「あっあっあっあっあっ」

「先生!、十六夜のあえぎ声がエロくて授業に集中できません」

「ご、ごめっ……! んっ!」

「はうう……！」

「十六夜…… 性処理係りの仕事も大事だが授業にも集中しなくちゃダメだぞ」

「は、はひ……！ すびばぜん……！」

「先生、次十六夜使ってもいいっすか」

「ああ、早くしろよ 先生も後で使うんだから」

ヒッヒッ

は

は



「ふたりとも大変ねえ……」

「私よりヒドいじゃん……」  
「うーん、授業受けられるだけマシかなって」



帰宅後――

「学生さんは大変よねえ……  
私は主婦だからそういうのなくて助かるけど……」  
「ママどうかした？」  
「ううん、何でも！」





「ただいま…」  
「おかえりなさい。あら、確か会社の…」  
「みゆき、部屋に行ってなさい」  
「？ はい」



「お邪魔します。 お久しぶりですね、奥さん」

「主人がいつもお世話になっております」

「いえいえこちらこそ。」

「今日は奥さんのお世話になろうかとお伺いしました」

「え？」

「聞いたよ…」

「育代が性処理係りになったんだって…？  
どうして僕に黙ってたんだい…？」

「それは…」

「博司さんに心配かけさせたくなくて…」

「まあまあ星空くん、言いにくい事ってあるじゃないか！  
それよりどこで奥さん抱いていいのかな？」

「……………」

「みゆきに知られたくないので寝室の方で…」

「それじゃ行きましょう、奥さん」

「は、はい…」



「あの、博司さん…」

出来れば性処理している所を見られたくないんですけど…」



「見て見ぬふりは出来ないよ…」

せめてキミの目の前で苦しみを共有したい」

「博司さん…」

「そういう事なら星空くんが

しっかり見えるようにしなくちゃな！」





「ああ、いいね！ 奥さんのおマンコ！ 前々から抱きたいと思ってたんだよねえ〜！」  
「そうですか…」

「おっぱいも揉み応えあるしねえ〜！」

「奥さんを好きにできる星空くんが羨ましいよ！」

「そうですか…」

「ほら、奥さん動いて！ この体勢だと私は動けないから」

「はい…」



「あぁ〜……！ 奥さんいいよぉ〜！」

（博司さんの前で変な姿は見せられないのに……！  
感じちゃいけないって思ってるけど余計に感じちゃう……！）

「こりやすぐイカされちゃうな！ 中に出して良いんでしょう？」  
「はい……」



「育代…！ 大丈夫なのか…！？」

「避妊しちやダメって言われてて…」

「赤ちゃん出来たら援助するって… 言えなくてごめんなさい…」

「そんな…ッ！」

「それじゃ、奥さんが私の子を産むって可能性も考えられるんだね？」

「そうです…」

「いや、中出しし甲斐があるなあ！」

「こりゃ毎日奥さんに中出ししない！」



「ああ、もちろん星空くんだって  
父親になる権利があるんだから  
どっちが奥さんを妊娠させるか勝負だよ」

「勝負… ですか…」

「男社会はいつだって競争社会だからね。」

「誰が奥さんを妊娠させるか競争だ！」

「……」



「ほらいくよ、奥さん！  
妊娠しやすいように奥の方で精子受け止めてね」  
「はい……！」



「おお！ 星空くん見た!?  
中出しされて奥さんイッチャったよ！ これは妊娠したねえ」

「あの… 俺もイツてよろしいでしょうか…」  
「俺も…」  
「ああ私にかからないようにね！」





「ザーメンまみれの奥さんもエロいなあ！  
これから毎日奥さんに種付けしに来るからよろしくね」  
「はい……」





後日――

「おはよう、ほまれちゃん、リコちゃん」

「おはようございます。」

「なんか育代さんスッキリした顔してますね」

「夫に性処理係りの事話したの。」

「やっぱり内緒にしてたのが心苦しかったみたいで打ち明けたらホッとした。」

「…旦那さんやっぱり嫌がったんじゃないですか？」



「まあね…  
でも誰かがしなくちゃいけないって…  
誰の赤ちゃんが産まれても大事に育てるって言うてくれたの」

「良い日那さんですね」  
「うん」



「私も赤ちゃん産んでいいかなって思うようになりました。  
そしたら中出しされるのも  
イヤな感じがしなくなった気がします」

「ん、そうだね…  
私も妊娠してもいいかって思ったら何て言うか…  
中に出されるの気持ち良くなってきたかも」



「うん、気持ち良い♥」  
「そうだよね」

「ふふっ  
うん！」  
「はい！」  
それじゃ今日もいっぱいセックスしましょっか」



「いいねえ、3人とも！  
腰使いから妊娠したいって気持ちを感じるよ！」

「そんな事ないですよ 私、夫がいるんですよ？」

「名前も知らないオジさんの赤ちゃんなんか産みたくないよ」

「そうですよ ちよつと気持ち良くなってるだけです」

「本当にちよつとだけ？」

「ちよつと… うーん… かなり…？」



「毎日セックスしてたら気持ち良くなるようになったっちゃんいますよ」  
「3人ともエロエロになったって事だね」

「私たちはエロくないよ！」

「エッチな事する人たちがエロいの！」

「そうそう♡」

いきなりおチンチン触らせたり

舐めさせたりセックスする人たちが悪いの」

「でも嫌な気持ちはしないんでしょ？」

「うん… まあ…♡」



「育代さん、出すよ」  
「はい♡」

「ほまれちゃんも」  
「うん♡ いいよ♡」

「リコちゃんもしっかり孕んでね」  
「はい♡」







「まだまだたくさんザーメンのおかわりあるからね」  
「はい いっぱいおマンコに出してください♥」



数ヶ月後

「俺の子かな？」

「いや、俺の子だろ」

「いやいや俺の……」

「皆の子供って決まりでしょう」  
「そう言えばそうだった」





「もうすぐ産まれるんだから乱暴しないでよね」

「ほまれちゃんの方が乱暴にしてるじゃない。  
めちやくちや腰振っちゃって」  
「そ、そうかな…癖になってるのかも」

あー  
あー

あー  
あー

あー  
あー



「赤ちゃん産まれたら俺の所来いよ。  
援助があるって言うってでもひとりで子供育てるのは大変だろ？」

「そうですね… 考えておきます」





「赤ちゃん産んだ後も性処理係りは続けられるの？」

「ええ、お父さんになった人が  
この子に会えないのも寂しいじゃないですか」

は  
は

は  
は

は  
は



「それにやっぱり兄弟がいた方がいいかなーって」

「セックスも気持ち良いしね」  
「そうそう♥」

「たくさん赤ちゃん産ませてあげるよ」  
「ふふっ、何人も産んだらお腹ダルダルになりそう」

は  
は

は  
は

は  
は



「それじゃこれからもずっとセックス出来るって事かな？」  
「ええ、だって私たちは性処理係りだから」

完